

# 各学科の教員配置数に関する調査

全国高等学校農場協会振興局

## 1. はじめに

農業科教員は、普通科や他の専門教科の教員と同様に学校業務を行うほか、広大な農場管理を行っている。また、授業や生徒の精神的ケアなど学校現場の業務が繁忙化中、その負担は大きく、教職員の健康にも影響しかねない状況にある。また男性職員を含む育休時間の弾力化、育休期間の延長や、病休・休職職員によって生じる代替の教員が各学校に配置されないまま新学期がスタートしてしまうという現実も存在する。このような事態を改善し、より良い環境で充実した農業教育が実践されるために現状を把握し、農業教職員の適正配置が行われることを目的としアンケートを実施する。

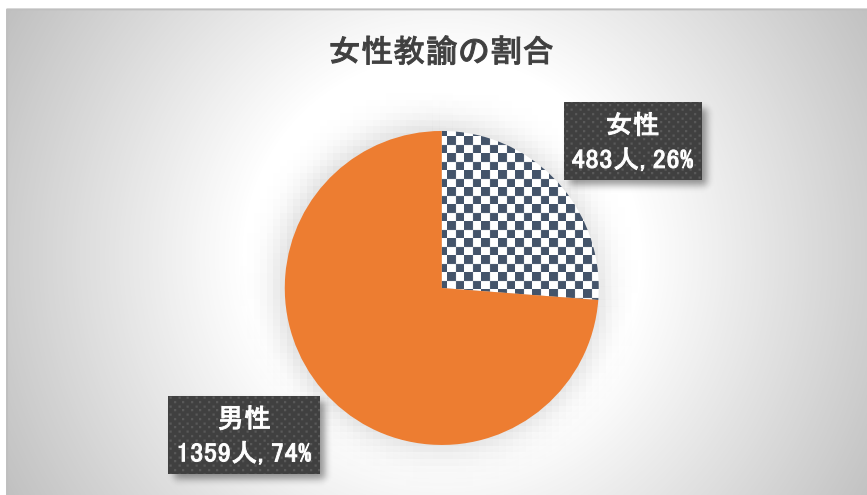
## 2. 対象

農業科目を設置している専門高等学校等(農場協会に加盟している高等学校)

回答学校数：47 都道府県、377 校中 回答 190 校 回答率 50.3%

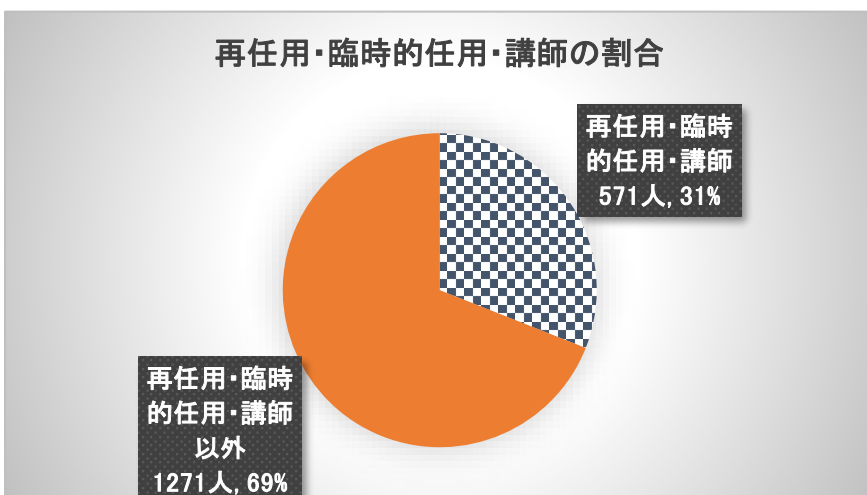
## 3. アンケート結果

### 1) 女性教諭(臨時的任用含まず)の割合



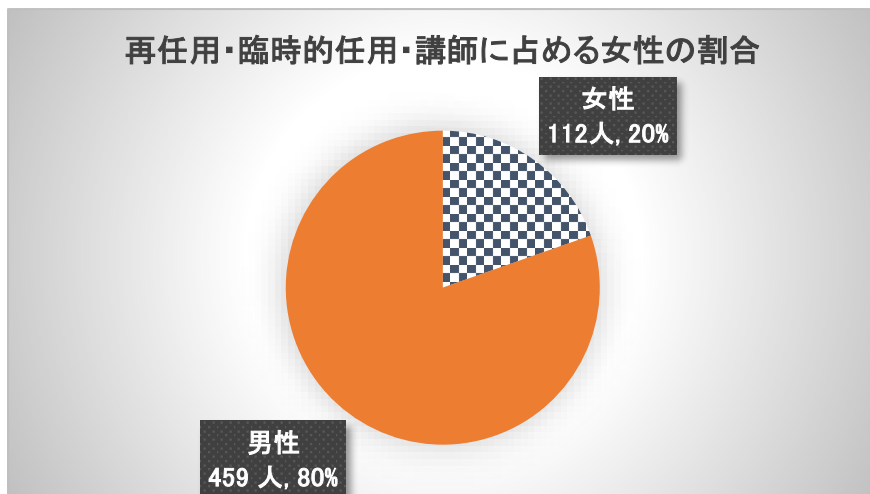
R4年度の割合は、21% (668人) R5年度は26% (483人)であった。回答数が昨年に比べ少ないが、割合としては昨年度を上回る結果となった。女性の採用数が多くなってきているようである。

### 2) 教諭に占める再任用・臨時的任用・講師の割合



R4年度、正規教諭 3245人・非正規教諭 445人、非正規割合が12%であった。R5年度は調査方法を変更し、再任用・臨時的任用・講師の割合で調査をした。その結果、割合が31%となった。3割近くが来年度再契約をしなければならない人員のため、安定した雇用数確保には来年度も苦勞することが想像できる。また、毎年顔ぶれが変わるとなると授業の継続性に問題が出る恐れがある。

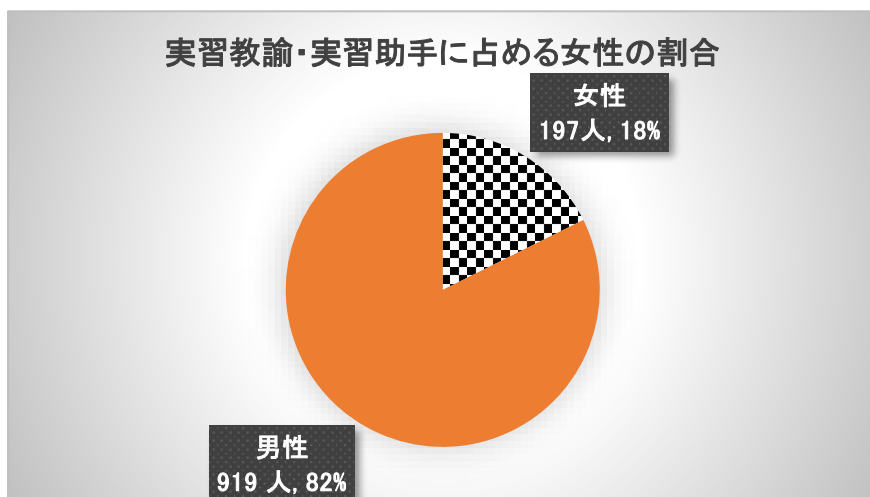
### 3) 再任用・臨時的任用・講師に占める女性の割合



R4年度の割合は、26%（115人）  
R5年度は20%（112人）であった。  
いろいろな理由から、本採用ではなく  
非常勤のような働き方を選ぶ方が多い  
ようだ。

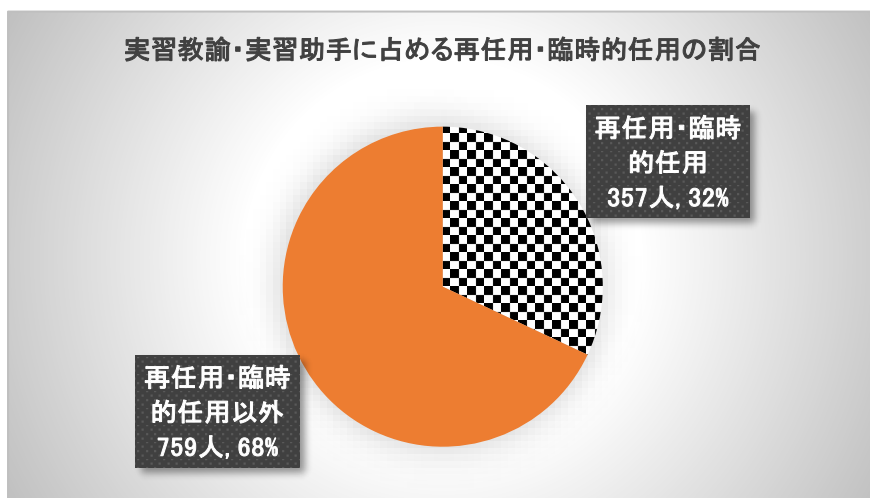
来年度も各校に赴任していただける  
ことを希望する。

### 4) 実習教諭・実習助手に占める女性の割合



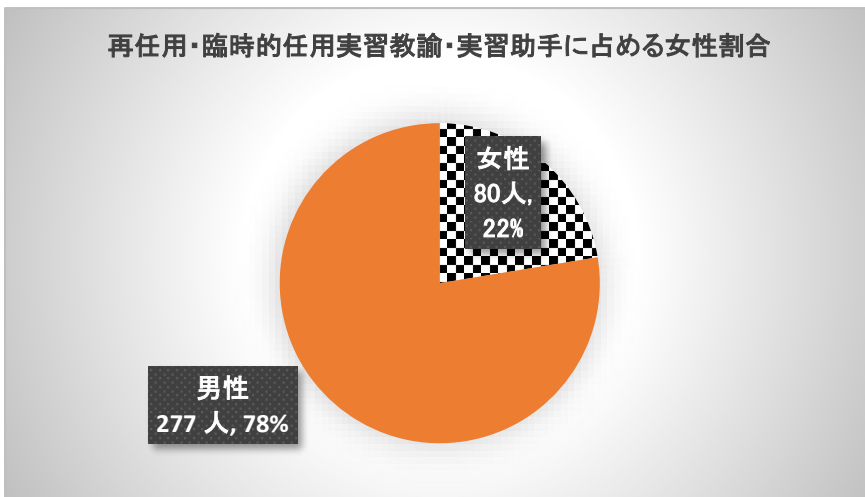
R4年度の割合は、17%（287人）  
R5年度は18%（197人）となった。  
各県において採用機会が少ないと思わ  
れ、毎年採用試験があるとよいのでは  
ないか。また、業務として体力的な面  
での心配もあり、なかなか希望者が  
増えないことも考えられる。なお一層  
のスマート農業が進み、体力面や技術  
面のサポートを機械が補ってくれるよ  
うになれば農業に参入する人も増える  
のではないだろうか。

### 5) 実習教諭・実習助手に占める再任用・臨時的任用の割合



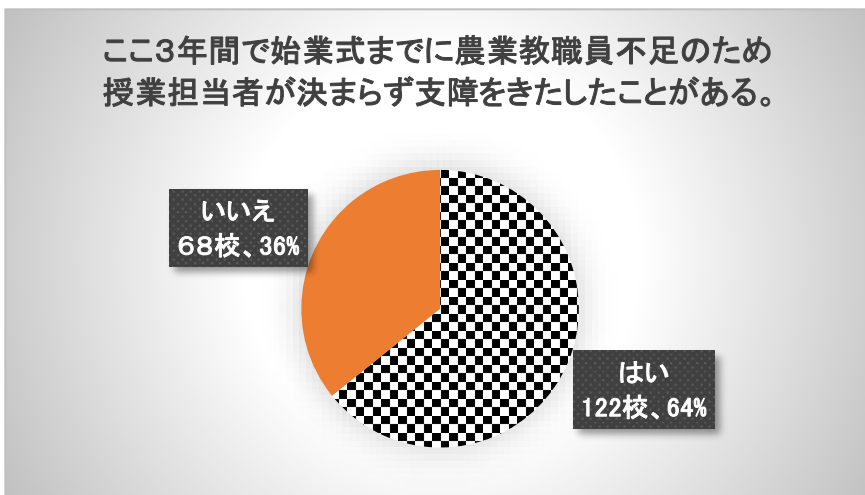
R4年度の割合は、17%（359人）  
R5年度は32%（357人）であった。  
調査件数が少ない割には昨年を大きく  
上回っている。4)でも述べたように  
人材確保が急務と考えられる。特に実  
習や圃場管理において実習教諭・実習  
助手の力は授業を進めるうえで重要だ  
と考える。各県での本採用数の増加を  
期待する。

## 6) 再任用・臨時的任用実習教諭・実習助手に占める女性割合



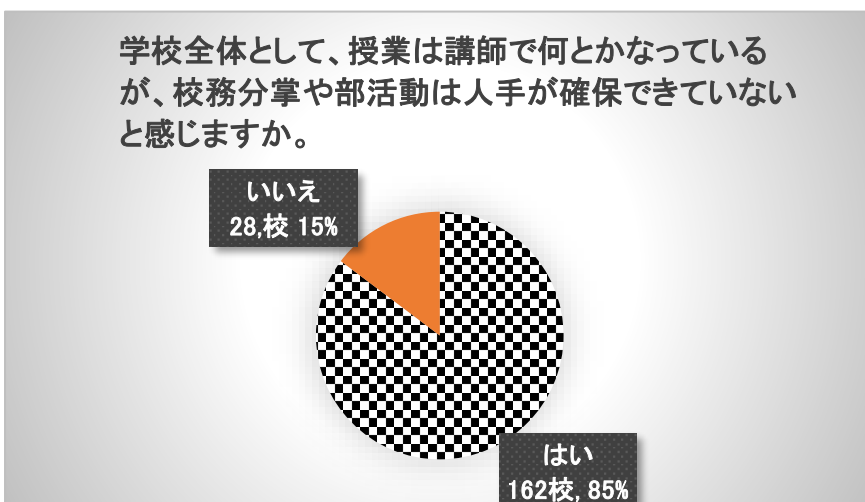
R4年度の割合は、29%（105人）  
R5年度は22%（80人）であった。  
相変わらず比率は高く、いろいろな理由から、本採用ではなく非常勤のような働き方を選ぶ方が多いようだ。

## 7) ここ3年間で始業式までに農業教職員不足のため授業担当者が決まらず支障をきたしたことがある。



122校/190校、割合として64%の学校が始業式までに農業教職員不足のため授業担当者が決まなかった経験をしているようである。人材不足が授業に影響している大きな証拠である。今以上に人材確保に力を入れていかなければ今後毎年このようなことが起こる可能性がある。

## 8) 学校全体として授業は講師で何とかなっているが、校務分掌や部活動は人手が確保できていないと感じますか。



162校/192校、割合として85%の学校が校務分掌や部活動、校外活動での役職により農場管理や授業準備などの時間に問題を抱えているようである。  
(各校からのご意見参照)

授業のように、講師や再任用で時間を埋められたとしても、担任や校務分掌の仕事を割り振れないのでは、多忙化を解消できないだろう。

常勤の職員を増やしていかなければ我々の多忙化は解消されない。

## 9) 今年度農業職員が担当する授業展開講座数

単純計算ではあるが、常勤の教員で今年度展開されている講座数を割ったところ、一人当たり10講座担当しなければならない。1講座あたり2単位としても20単位受け持たなければならない。そこに部活、校務分掌、担任業務、郊外活動、農場管理、授業準備を足せばおのずと時間が足りないのは目に見えている。

## 10) その他にあればご記入ください。

ここからは自由記載で各校の現状を書きいただいている。この声を国や県は真意に受け止め、改善できるようにして頂きたい。

### 各校からの意見

- 農業高校は担任をはじめ、**校務分掌**も重要なところに配置されている。一人何役もしている状態で疲弊している。
- 実習教諭任用で授業ができています。
- 農業科講師の**人材不足**が著しい。
- 卒業生ばかりが教員になっているため、**多様な人材育成と人材確保**が必要である。
- **人員確保**が大変困難。
- 将来の学校づくり計画に関係しているのかもしれないが、**退職する人がいても、採用が少ない**為、年々、時間講師を探すことが多くなっている。いよいよ、来年は講師が見つからないのではないかと不安でいっぱいである。
- とにかく**マンパワー**が不足している。
- 今年度は、7月から**産休の教諭**があり、**補充の見込みがない**。マイナスで運営になる。
- **新規採用を増やし、最低限の人員の確保**をすべきである。
- **欠員補充を現場で行うのは極めて難しい**。
- 小規模校のため、1人何役も担っており**多忙**である。
- 農場規模に対しての**農業科職員不足**を感じている。**人手が回らない現状**。
- **産休代理の職員が見つからなかったり、人がいない状況**です。
- 年度が始まるまでには講師や実習助手などを確保できたが、**探すのに苦勞**をしている。そのため、**再任用を過ぎても教育支援員などの形で勤務をお願いしている状態**である。
- **年齢構成がいびつ**で、業務の継承などがスムーズにできない。
- 農産物販売や小学校などの校外学習を引き受けることがあり、**学科や部門での作業の偏り**が見られる。
- 部活では地区や県の**専門委員長**を引き受けることがあり、**業務の負担増**につながっている。
- 配属される農業科教員の定数が決まっています。一人当たりの**授業時数を減らすためには、一斉授業を増やさなければならず、個に応じた指導や学習の深化、プロジェクト学習の推進**などができなくなってしまいます。**慢性的な人手・人材不足に悩んでいます**。
- **臨任教諭を確保することが毎年困難**であり、**最後は現場で探すことになり、苦勞**している。
- **なんとか教員配置数は確保**できているが、**講師や臨時ではスキル不足**を感じている。
- 教員の**スキルアップ**に課題がある。
- 本校では、**育児のための時間短縮勤務**を取得される教師が近年増加し、**校務分掌や時間外総合実習等の教科担当教師**を選出するときに課題となっている。更に、**時間短縮勤務取得者のカバー**を誰かがしなければならず、**職員数には現れない忙しさ**がある。

- 年度途中で産休に入られる先生がおられたときに、農業科の免許を持たれた方が見つからず（年度当初から産休に入ることがわかっていて探していた。）、先生の持たれていた科目17時間分を、関係する学科を中心に皆で手分けをして授業を行った。
- 今年度はなかったが、病休や産休、育休などの代替教員の確保が非常に難しい状況にある。このことについて農場協会からも、関係機関に働きかけてほしい。
- 農場管理に加えて、土日の部活動まで手が回らない。
- 教員の定数を増やすことが重要です。このままだと、学校も農場も教員自体もパンクです。
- 教員不足ではあるが採用試験のハードルは下げず魅力ある職場になるように人材を確保してほしい（人材不足→1人の仕事負担増→過労増→魅力減→教員希望者減）
- 現場を管理する嘱託員が不足している
- 教職員不足は常態化しており、本来の担当時間以上に授業を担当している教職員が複数いるのが現状である。
- 助手2名分の確保ができていない。
- 30人学級、教員の増加が実現されると、多様化が激しい生徒・保護者一人一人への対応が以前のようにできる職員が増え、生徒・保護者・職員の負担軽減につながると考えられる。また、授業やホームルーム運営などの負担が減少される。
- 土日も部活動の指導で休めず、勤務時間数が減少されない職員が多く「きつい」と学校医に漏らす職員も出てきた。
- 教員採用試験を行っても応募者が少ないため、定員を満たせない。
- 一人当たりの負担が大きくなっており、増員が必要。
- 毎年の採用人数を増やしてほしい。
- 教員配置数の改善を強く希望する。
- 人材不足。
- 病休、育休、時短などの教員の代替がなかなか見つからず、在籍している教員で授業や業務を分担している。
- 農業教員不足が加速している。
- 職員の増員をお願いします
- ここ数年、農業科職員（教諭枠）が不足しており、その不足分を他の教員が担当し、何とか授業が成り立っている。ちなみに本年度は教諭が2名不足しており、他の教員が週21時間以上の授業を担当している状態である。
- 欠員ができた際の臨時任用を探すのが大変である。
- 再雇用の割合が多い。
- 人員が不足。
- 校務分掌が複数掛け持ちになっている。
- 農業科職員数が減じられ、さらに分掌主任で授業持ち時間軽減、全職員が多く授業を持たなければならない状況である。このままでは生徒に授業の保障や安全に実験実習を行うことはできない。
- 農業の非常勤講師の確保が難しい。
- 農業科教員の積極的採用をお願いしたいです。
- 普通科目で非常勤講師が多く、農業科の時間割にも影響が出ている。
- 非常勤講師を4時間お願いしたいがいいため、実習に2時間お願いしている。科内に工業の教諭が配置されているため、農業の授業も2時間お願いしている。（新課程のため今年度は工業の授業が少ないため）

- 年度初めに職員が決まらなると、授業&時間割が組めない状況ができた。
- 学級減にともない、教職員定数が減り、分掌の仕事をこなしていくのが大変である。人によっては、以前の二倍の仕事量をこなしているものもある。
- 教員不足ではあるが、教員免許を簡単に取得できるようにするのは違う。根本的な業務の見直しが必要。
- 農場業務用多忙の中、教員配置数を増加してもらいたい。
- 休職等に伴う臨時的任用の職員や再任用職員が農業科目だけでなく校内の半数以上を占めており、若手職員に仕事を任せっきりになってしまう傾向が強い。そのため、見かけは分掌に人を配置していても機能していない。また、職員の高齢化が進み、キャンパスとして活気が無いに等しい。
- 採用試験の受験者数の減少。常勤講師を依頼する場合登録されていない。
- 専門科目教員としての資質と能力の低下が著しく、業務に対する意識も希薄である。
- 教員採用試験高校農業の受験者数の大幅な減少。常勤講師希望者の減少。
- 実習教諭の病代が見つからず3カ月間不在のまま授業や実習を行わざるをえなかった。
- 校外でのイベント参加や販売実習等、生徒の学習の機会確保のために人手は必要だと感じています。
- 新規採用者の研修のため新規採用者の時間数を少なくするのはわかるが、指導教員まで少なくしなければならぬのは改善してほしい。結果的に時間講師が増えてしまっている。
- 授業数に対して教員が足りない。
- 教員一人当たり持ち時数が多く、他の業務にも影響する。
- 愛媛県は数年前より採用を再開してきているものの、不人気及び農業科教員免許取得者の減により、講師が見つからない。
- 非常勤講師の数が愛知県全体で不足している。毎年、本校にも卒業生が教育実習に来てはいるが、新卒で合格しないと民間企業に就職してしまい、農業教員としての採用に結び付いていない。
- 適切な教員配置を考えてほしい。部分掌や各主任等、授業だけでなく学校校務は激務の状態にあり勤務超過しなくてはできない状況にある。働き方改革と言われているが、今の仕事の割振り状況では勤務時間内に仕事が終わらない。仕事量の差があまりにもあり過ぎる。
- 農業科職員の年齢がいびつ（50代が多く、40代が極端に少ない）なこともあり、職員の配置（年齢構成）がアンバランス。
- 仕事量が増えていて、教諭が農場に足を運ぶ時間が奪われていると感じる。
- 今年度から福祉科が作られた。来年には福祉科に実習助手を1名つけなければならず、県からは、農業の実習助手の1名分をそこに充てるようにと言われている。他学科ができたことによって、何故農業から実習助手を1名減らされるのか、強い憤りを感じる。農業のコマ数が減っているわけでもないし、農場の規模が減っているわけでもない。
- 授業・校務・部活動で助手や教諭は疲弊しています。
- 生徒が充足している農業科学科職員と生徒が充足してなく職員に余裕のある学校との不公平があると感じる。1校当たりで行う業務は同じ。
- 本県も継続的な教諭や実習助手の採用試験の開催を望みます。
- 若手教員への技術の継承。
- 研修へ参加する場合の人的保証や旅費などの有無。
- 第77回日本学校農業クラブ全国大会（令和8年度南四国大会）事務局を受けるにあたり、教員数の確保が課題である。
- 休職者がいる時に補充が欲しい。
- 再任用職員が顕著に増加している。技術の継承など職員配置に苦慮している。

- 行事に加え、地域やその他からの行事参加依頼や連携、協力依頼が増え、授業や校務分掌等に負担がかかってきている。
- 現在、2校地制をとっていて令和6年4月より校地統合される。統合先の校地に2年前から新学科が設置されているが、農業教員が少なく、実習や農業科関連行事では教員を派遣している。一つの高校で管理すべき農場が二つ存在することになるのに、教員は高校に対して頭割りで配置される。現場の状況に応じた加配が必要である。
- 臨時職員でなく、教諭で定数を満たして欲しい。
- 臨時任用職員（実習助手）採用が増え、人員を探すのに苦慮している。
- 臨時的任用教員には継続研究が難しい面がある。
- 欠員を生じない採用及び異動を行ってほしい。
- 授業時数と校務分掌、部活動をすべてやると必ず月の残業時間が80時間を超える。
- 配置されている教員数が少ないため、一人ひとりへの負担が大きい。また、正規教員が少ないため、臨時的任用教諭が担任を任されたりしている。
- 退職による正規職員枠を臨時的任用で補充するのは、勤務年数が限られている離島の学校からすると定年転勤に支障をきたす。そのため離島かつ少数の学校においては、人員の配置は慎重に進めてほしい。
- 心の病を抱える職員がおり苦慮しています。職員の心の負担を軽減し、やりがいのある職場にしていきたいと思っています。
- 適切な人数を確保してほしい。
- 職員配置数が少なすぎる。（業務が繁雑すぎて、授業の質の確保が難しい）
- 若手の職員が必要である
- 事務職員（会計年度職員）の手を借りて何とか農場運営をしており、年齢的にも高齢化が進んでおり、綱渡りのような状態です。
- 令和7年度の高文祭の部門の代表委員（事務局）が農業の職員にいる。来年度、再来年度の授業時間数から考えると、講師が来てくれるのか、不安である。
- 農業教員を増やす必要がある
- 常時、人不足です。現在、1人の講師の実習助手さんが来てくださっていますが、農業の経験なしの方で定年退職された方のため、今のところ「お手伝いさんが来てくれた」という状況です。
- 正規で若いこれからを担う人材が来てほしいと思います。
- 自然環境の変化、生徒の多様性、社会から求められることなど、変化が多い中で、現場の管理を含めて、人数や人材が不足している。クラス数などを基準にしない採用が必要。
- 再任用の期間（65歳）が終わり、ご本人は完全退職を希望しているが、代替りの人材が見つからない。実習科目への時間講師は探すことが難しい。
- 農業以外で教員数が不足しており、毎年非常勤講師の確保に苦労している。
- 総合学科なので生徒の選択によっては、開講時数が増えるが、それに伴い教員が増えるわけではない。来年度で閉校舎となるためやむを得ないかと思うが、授業時間に十分な人員が確保されていないことで非常に支障をきたしている。
- 講師を探すのが大変です。なかなか見つかりません。
- 年々職員数が減らされる傾向で、教科指導以外の校務も増え、現場にゆとりが無くなってきている。
- 農業教員の不足が課題である。
- 学校外の渉外活動に人員が不足して困っている。
- 再任用・臨時職員が多すぎる。採用を考える必要がある。
- 本校のような小規模校は、農業教員を減らしすぎると農業も校務分掌も両立ができなくなる。